

ハイデルベルク信仰問答より

問 99 第三戒で、何が要求されていますか。

答え それは、私たちが呪ったり、偽ったり、不正な誓いをして神の御名を汚したり、乱用したりしてはいけない、ということでもあります。また、私たちは黙認したり、傍観したりすることにより、このような恐ろしい罪に関与してはいけない、ということでもあります。

要するに、私たちは恐れと崇敬の念なしに、神の聖き御名を用いてはならないのであります。それは、神が私によって正しく告白され、呼ばれ、私たちのすべての業と言葉によって、ほめたたえられるためであります。

第三戒 あなたは、主なるあなたの神の御名を、無意味に唱えてはならない。なぜなら、主は無意味に御名を唱える者を、罰しないではおかないからである。

問99～102にかけて「神の御名をみだりに唱えてはならない」という戒めについて学んでまいります。まず翻訳で注目したのは、ペリーの注解書では「みだりに」の部分が「無意味に」と訳されている点です。口語訳、新改訳、新共同訳、聖書協会共同訳などを見ましたが、どこにも「無意味に」ということばはありませんでした。英語では、NKJVでは「in vain」（無駄に）、TEVでは「for evil purpose」（悪い目的で）となっていたのが興味深いところです。原文を当たると、「emptiness」「vanity」（むなしさ）、「falsehood」（偽り）などを意味する「κῆψ」（シャーヴ）という名詞が使われており、それに「in」に相当する前置詞が付いていることが分かります。つまり、「神の御名をみだりに唱える」とは、神とは無関係に発せられる「神」という言葉、神を引き合いに出して偽りを語るということを意味するのでしょう。

私たちの身近ではどのようなシチュエーションが思い出されるでしょうか。私が小学生だった頃、同級生たちがしきりに「OMG」と言っていたのに影響を受け、私も自宅でそれを口にしたらところ兄にこっぴどく叱られたことがあります。「それは神の御名をみだりに唱えていることになるんだぞ」と。そうなのかもしれません。人は意味も分からずに神に対して罪を犯している可能性があります。英語圏では「goddamn」という下品な言葉が使われることがあります。これは「god」（神）＋「damn」（畜生）という「罵り」「呪い」の言葉です。映画などでも「何てことだ」の表現として「Jesus Christ」が代用されている場面をご覧になったことがあるでしょう。アメリカでホームステイしていたとき、ホストマザーが「Oh my」とか「My Gosh」と言っていたのを思い出しますが、これらは「God」を使わないように婉曲的に同じことを言っているのです。

よく似た事例としては、ヘブライ語で「ヤハウエ」を表す四つの子音字「YHWH」は、直接それを発音しないように「主人」を意味する「アドナイ」という語の読みが当てがわれていたところ、いつし

かどう発音するかが分からなくなってしまうという経緯が挙げられます。イスラエル人はそれほどまでに「主」の御名をみだりに唱えないよう心を配ったのですが、おそらくこの習慣もまた形骸化していったことでしょう。神様が真に求めておられる「御名をみだりに唱えるべからず」という戒めは、どうということなのでしょう。

ペリーは、人間の名前を例として、人は自分の名前が蔑^{なみ}されるのは好まないはずだと指摘します。例えば、私の名前は「喜樹」ですが、「洋式便所」などからかわれたことがあります。もちろん気分の良いものではありません。名前はその人の人格そのものを表すことが多く、とりわけ聖書の世界ではそれが顕著です。神の御名は神の人格を表す。「ヤハウエ」とは、「共にいる」を本質的に意味することばなのです。私たちは罪深い人間であるけれど、罪の赦しを受け、神が永遠に共にいてくださる存在となった、そのことを喜びと感謝をもって告白すべく、「わが主よ」と呼ぶのです。意味を理解せずに「主よ」「主よ」と呼ぶことには注意が必要です。

「御名をみだりに唱える」ということの本質には、神を引き合いに出して嘘をつくということが挙げられるでしょう。言い方を換えるならば、嘘を隠すために権威ある神を持ち出すということです。「天地神明に誓って」という政治家の言葉がかえって疑わしく聞こえてしまうのは、彼がまさしく「みだりに御名を唱えている」からではないでしょうか。

しかし、神の御名によって誓うべき事柄もあります。人と人との契約関係に入るとき「神の御名によって」それがなされるならば、目に見えない方がいつも私たちの関係をご覧になっているという「畏れ」を伴うものとなります。これについては問101で学ぶことになるでしょう。

今日はまず、私たちの生活の中から神に対する偽りを締め出すことに集中したいと思います。イスラエルの民がお叱りを受けたのは、彼らの言葉と行動が一致していなかったからです。表面上は敬虔な礼拝をささげながら、生活の内実には神がおられないということがあります。神の御名はそのような生き方によって「むなしく」唱えられるのです。